

米山梅吉記念館 館報

2009
(平成21年)

秋

Vol. 14

米山梅吉さんはどんな人?

米山梅吉さんは、明治元年(1868)2月4日に東京で生まれました。そして梅吉さんが13才の時に沼津中学校、青山学院とすみました。その後アメリカへ留学しました。そして、**米山文庫**に約千冊の本をきふしました。



米山梅吉記念館に行ってみよう!

古い米山梅吉記念館

この記念館は、昭和44年の3月26日にできました!



新しい米山梅吉記念館

この記念館は、平成10年の4月28日にできました!



長小には、米山文庫があった!

「米山文庫」とは長小にあった古い図書館のことです。この図書館は、米山梅吉さんが昭和6年(1931)に本を約千冊きふして作ったものです。そのころは、けいさがあろうてくるしか、たのびますが子どもたちはもちろん村人たちがこの図書館の約千冊の本を理用しました!



米山梅吉の写真館



平成5年に長泉町内の小中学校で始まった米山梅吉デー。各校が毎年様々な奉仕活動に取り組んでいる。また、地元長泉RCは、各学校に出向き、米山について、奉仕について紹介する活動も続けている。

「この方は何事にも一生懸命に取り組み、他人の幸せを大切にしていたのかな」「私も、米山梅吉さんの言葉どおり、自分から何かをするということを心がけたいと思いました」「米山梅吉さんのすばらしさを知ると共に、自分を改めてこのままで良いのかと思い直すことができました」「日本人の誰もがボランティア活動をしてみようという強い志を持つことができるのならどんなに良いことか」「米山さんの人に望むことを自分が相手にする、という精神は日頃母にも教えてもらっていますが、どうしても反抗してしまいます。これから気持ちを改めその精神を忘れず生活していきたい」生徒達の感想からもみてとれるように、米山梅吉デーは奉仕の心を学ぶだけでなく、日々の生活を見直すきっかけにもなっている。

米山梅吉デーの意味を説く活動と、それをしっかりと受けとめた生徒たち。双方向のベクトルは、確実に米山の精神へと近づいている。



財団法人 米山梅吉記念館



米山梅吉記念館40周年を迎えて

理事長 渡 邊 脩 助

米山梅吉記念館は昭和44(1969)年の開館以来、40周年を迎えることになりました。これも一重に、全国のロータリークラブとロータリアンのご支援・ご協力の賜と心より感謝とお礼を申し上げます。

当記念館は、日本のロータリーの創始者米山梅吉翁の遺徳を偲び、その偉業を讃え、ロータリー精神の普及を図るため、昭和44年3月26日、財団法人米山梅吉記念館として発足しました。米山家本邸跡地に米山家ゆかりの人々、静岡県東部の近隣11ロータリークラブの協力、国際ロータリー第2620地区(静岡県・山梨県)はじめ、第2590・2780地区(神奈川県)、東京ロータリークラブ、ロータリー米山記念奨学会等のご寄付によって建設され、法隆寺の夢殿に似た外観の旧館が同年9月16日に開館されました。

その後来館者の増加に伴い、館の狭隘と老朽化から新館建設の機運がたかまりました。平成8年の翁没後50年忌を記念し、新館建設を全国のロータリークラブに呼びかけましたところ、幸い多くの賛同を得て、多数の拠金が寄せられました。更に東京ロータリークラブ、ロータリー米山奨学会、長泉町、第2620地区、個人の特別寄付等大口寄付を頂くことができ、平成10(1998)年4月28日に新館が完成しました。

この完成を機に、役員構成を全国組織に改組拡大し、国内はもとより海外・アジア地区からも来館者が増加し、国際的規模に発展して現在に及んでいます。

この間に、当館として特記すべきことは、平成14(2002)年11月27日の2002-2003年度のビチャイ・ラタクルRI会長の公式訪問であります。

満面笑み湛えたRI会長の館訪問、植樹(金木犀一樹名・慈愛)及び年度テーマの彫りこんだ記念碑除幕、素晴らしい講演会。更に多地区合同奉仕活動として当記念館が国際ロータリーから許可され、それを機にロータリー徽章の掲示が認められるようになりました。

「THE FUTURE OF ROTARY IS IN YOUR HANDS(ロータリーの未来はあなたの手の中に)」を今年度のRIテーマに掲げたジョン・ケニー会長は「質的にも量的にも会員増強」と「ロータリー独特の職業奉仕への取組みを強調」されております。我国においては継続的会員減少に歯止めがかりません。当地区でも昨年度「各クラブ純増1名以上」を地区目標にしましたが、残念ながら増加しておりません。各地区、各クラブにとっても、また記念館の運営にとっても、会員増強は重要な問題であり、更なる努力をしなければなりません。

今年の秋の創立記念例祭は、40周年記念例祭として、9月19日(土)に開催します。最近の経済状況を考え、35周年記念祭のように盛大には行わず、記念特別講演と記念館功労者表彰を行う予定でおります。

予てより計画されておりました館周辺の道路工事も来年3月には完成しますので、館への道順もわかりやすくなり、景色も変わるでしょう。

平成21年12月1日から公益法人制度改革に伴い、公益財団法人の認定等に関する法律が施行され、行政庁の公益認定を受け、公益財団法人に移行することになります。当法人としては公益財団法人の認定を受けるための認定申請を準備しております。

記念館の運営の厳しい状態には変わりありませんが、全国のロータリアンのご支援によりまして、苦戦し乍らも順調な運営を続けております。全国各地よりご来館下さるロータリアンが増えており、移動例会も多くなっております。新館が完成後10年たちますが、常設展ばかりでなく企画展も考えておりますが、諸般の事情により、未だに実現しておりません。更なる内容の充実を計り、日本のロータリアンのメッカとして「米山詣で」をして頂けるような記念館となるべく努力をし、多くのロータリアン・米山奨学生・一般の方々のご来館をお待ちしております。

春季例祭

- 日時 2009年4月26日(日)
- 会場 (財)米山梅吉記念館 ホール
- 例祭及び墓参
- 挨拶
(財)米山梅吉記念館
理事長 渡邊 脩助
第2620地区
ガバナーエレクト 飯田 祥雄氏
- 記念講演
演題 「江原素六と沼津兵学校」
講師 国立歴史民俗博物館
准教授 樋口 雄彦氏
アトラクション
テノール 山村 尚正さん
ピアノ 宇都宮泰子さん
- 懇親会

記念講演

樋口 雄彦

今日は江原素六と沼津兵学校というテーマです。米山梅吉さんが学んだ沼津中学校が沼津兵学校の流れをくむ学校であり、梅吉さんは昭和9年『幕末西洋文化と沼津兵学校』という本を書きました。私が、偶然にも最近沼津市明治史料館通信に書いた「徳富蘇峰の沼津兵学校評」という文章をみながらお話を聞いてください。

明治19年に一つの県に中学校は一つという政府の方針で韮山、掛川、浜松、沼津中学校などが廃止され静岡県では静岡中学校に一本化されます。沼津中学校は明治9年に出来、10年位しか続きません。梅吉が学んだ古い沼津中学校の前身が沼津兵学校です。江戸幕府が倒れ、徳川将軍家は静岡で70万石を与え



樋口雄彦氏



ご来賓の皆様



山村尚正 さん

られ、一大名として東京から静岡に移ってきました。その家臣だった元旗本御家人達が明治元年の夏から秋に今の静岡県内に移住してきます。その冬には学校ができ明治2年正月には学校が開校しました。徳川家が藩の学校として作ったのが陸軍の士官学校の沼津兵学校です。学校の内容も優れていました。西洋式の士官将校を養成するので英語、仏語、数学などに力をいれ、日本の伝統的な教育にはない仕組の下で、新しい教科をそれまで幕府に仕えていた優秀な学者軍人が教授になって教えます。落ちぶれたとはいえ、徳川家は日本の政権を270年担ってきた存在なので文化的教育的遺産がありました。ハード面は明治新政府に引き渡してこなければならぬ部分もあるのですが、優れた人材、新しい教育の内容や仕組みは静岡に持ってきた。ここで徳川家の再生を教育にかけることになり、これが沼津兵学校に結実します。

優れた幕府の遺産を引き継いだ沼津兵学校ですが、

限界がありました。徳川家は、将軍から一大名、地方政権に成り下がったので、いくら先進的な教育を行っても日本全国に普及させるという役割までは期待できなかった。しかし単なるローカルな学校で終わったわけではありません。それは他藩、特に福井・徳島藩など遠くの藩から留学に来た人がいて、それを自分の藩に持ち帰り静岡沼津方式の新しい教育、学校制度を自分の藩に取り入れました。他藩の依頼で、沼津兵学校の先生や生徒だった人が、教えにいったこともありました。一番大規模にやったのが幕府を倒した張本人である鹿児島薩摩藩。感情的には面白くない面もあったようですが、そういう交流を続けることによって、戊申戦争時の悔しさも雪解けをむかえ、日本はこれからは一つになっていかなければ、ということで感情的な棘もなくなっていったようです。

地方政権になってしまった静岡藩ですが、むしろ明治新政府より先んじて全国的に新しい教育の仕組みを広げる先駆的な役割を担った。ただ、明治4年の廃藩置県により、静岡藩も沼津兵学校も3年半くらいの短命に終わります。なかなか具体的成果があげられませんでした。沼津兵学校で教育をしたり受けた一部の人材が、東京で明治政府の中に取り込まれ沼津で試したことを全国レベルで行えるという、立場をかえて引き継がれていった面があります。そこが米山さんが、客観的にみて日本の近代化の歴史のなかでも高く評価できる存在である、とこの本を書いた由縁であり、私が沼津兵学校をテーマに研究を続けているのも、沼津市が明治資料館のような博物館をつくった理由もそれです。



沼津兵学校の碑 (沼津駅前)

では具体的に米山さんとの関わりで、徳富蘇峰の沼津兵学校評を見えます。徳富蘇峰(1863~1957)

は、熊本出身。米山より5才上で、ほぼ同時代です。明治大正昭和の戦後までを生き続けた言論界の怪物のような人です。昭和9年4月29日東京日日新聞(現毎日新聞)の夕刊で、蘇峰が言論界の大御所として米山の著書の評価したのがこの「日日だより」。米山梅吉君の『幕末西洋文化と沼津兵学校』を読む、というタイトルでよせました。「今日の所謂実業家中には、筆を揮うこと、算盤珠を弾くが如き者少くない。即ち小林一三君の如き、片岡直方君の如き、藤原銀次郎君の如き、福沢桃介君の如き、松永安左衛門君の如き、其他記者が知る可くして未だ知らざる人々も少くあるまい。その中に於て、米山梅吉君の作物を見る毎に、君や誤りて実業家になったのではないかと思ふ。」小林一三は阪急の社長を務め宝塚歌劇団を作った人物、片岡直方は東京ガスの社長を務めた人です。この二人は大阪RCのチャーターメンバーです。藤原銀次郎は慶応出身。三井銀行で活躍し王子製紙社長、大臣もやりました。福沢桃介は福沢諭吉の養子で実業家として活躍。松永安左衛門も慶応出身、電力会社社長を務めました。こういう錚々たる実業界の中の筆の立つ一人として、蘇峰は梅吉を高く買っていた。「これは勿論妄評であらう。けれどもそれほど米山君の著作は、玄人向きに出来てゐる。今回記者の手許に達したる「幕末西洋文化と沼津兵学校」の一小冊子の如き、実に玄人跳足と云うところだ。本書は明治最初期に出で来りたる沼津兵学校の成行を叙したるもの。然も小題大做、此の眇乎たる一個の学校を題目として、如何に幕府が明治の文化に貢献したるかを説き、正に是れ幕府の爲めに、気焔万丈を吐き出したるもの。」「記者は沼津兵学校に就いては、聊か知る所があった。明治中期、記者等が世間に顔を出す際に、その先輩として言論界の指導者であった田口鼎軒、島田三郎の諸君は、其の学生であり、而して大先輩たる西周、田辺蓮舟、中根香亭の諸先生、皆な其の教授であつた。而してその後身たる沼津中学校の経営者にして最初の校長は、実に江原素六君であつた。」この箇所が蘇峰に一番通じたところ。なぜなら新聞記者の若き蘇峰が、初めて言論界に身を乗り出していった頃の輝けるような先輩として仰ぎ見たのが、沼津兵学校出身の田口、島田という人だった。彼らは旧幕臣の出身ですので元々薩長藩閥に対しては反感を抱き、自由民権運動から大正デモクラシーまで常に在野の精神を貫き、明治政府に対して一番抵抗し、民主主義を唱えて頑張った人です。田口、島田のさらなる先輩の西周や田辺蓮舟、中根香亭等も沼津兵学校の教授

だった。西周は沼津兵学校の頭取(校長)です。西周は幕末にオランダに幕府の留学生として派遣されます。理工系の学問からが自然な入り方でしたが、西は、欧米が進んでいるのは文化系のものもあるのでは、と今でいう政治学、経済学、社会学、統計学、哲学などをオランダで学びます。沼津兵学校なき後は明治政府が活用します。教育勅語の元を作り、軍人勅諭を起草し、民間では明六社をつくって民間の学者団体として日本人を啓蒙する活動を行い、外国語を翻訳しました。哲学、帰納、演繹といった難しい日本になかった言葉を翻訳し今私達が普段使っている言葉をつくった人です。元々の幕臣ではありませんが、幕臣に取り立てられます。

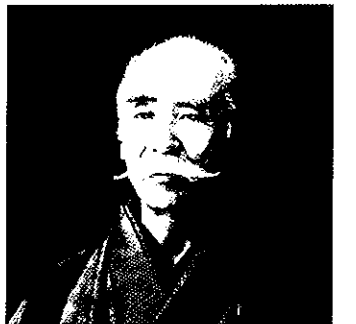
蘇峰は後に東京に出て新聞記者として活躍し、島田や田口の活躍を見、直接交流する中で、沼津にはかつて徳川家がつくった優れた学校があったことを知った。そして沼津兵学校のことが頭に残っていて、梅吉の本が送られて来たときも記憶に蘇ったのでしょう。「沼津兵学校が凡有る意味に於て文化に貢献したるは云はずもがな。其の大局から見れば、是亦た幕府が文化施設の一部作業に過ぎなかつた。如何に幕府が文化に貢献の大なることよ。諺に楚財晋用と云ふ。明治政府は薩長人士によりて建立せられたが、其の知識と手腕とは、幕府が養成したる人材によりて供給せられたることは、若し当時の官員録を披らき来れば、之を知るに余師あらむ。それは民政にも、文教にも、財政にも、軍政にも。其の他一切の方面に於て、皆な然りとする。」これは沼津兵学校があらゆる面において日本の近代化明治の文明開化に果たした役割が大きかった。言い換えると沼津兵学校の前身である徳川幕府がいかに明治政府がやるより前に手がけ、幕府がやりかけたことが明治政府に引き継がれ貢献したということを言っています。徳川家を倒した薩長の側からすると幕府は否定されるべく悪の権化、旧体制、抵抗勢力ということになります。その辺を蘇峰は平等に見ていて、徳川幕府はやり方は失敗し倒れたが、やろうとしてやり始めていたことは間違いではなかったということを見ていた。その現れが沼津兵学校の人材によく出ているということです。

例えば大蔵省租税局の役職と名前、名前の上に必ず出身地本籍地が印刷されています。鹿児島とか山口とか高知とか、この人は薩長藩閥で政府に入ったとかわかるのです。明治一桁代の官員録をめくると鹿児島や山口が多いのは薩長藩閥でよくわかります。それに匹敵するくらいむしろ中堅や下の方には静岡、

と印刷されている人が多いのです。なぜかという。蘇峰が書いたとおり、それまで幕府の役人だった人たちがリストラしてしまつては明治政府が立ちゆかなかった。幕府のやってきた仕事を明治政府が引き継いでいかないと国家の運営ができなかった。沼津兵学校で新たに育てられた優秀な人材を入れた、ということを含め幕府徳川家が生み育てた人材により、明治の近代化が達成されたということを蘇峰も分かっていた。米山の沼津兵学校の本を読み返すことによってそのことを改めて認識されたということです。大蔵省、農商務省、文部省、陸軍省、海軍省などあらゆる省庁で官員録をみると、静岡旧幕臣出身者が多く、なかでも選りすぐりは沼津兵学校出身者です。沼津兵学校の先生は、幕末の段階で洋学や新しい西洋式の軍事を身につけた優秀な人材でしたので、そのまま明治政府に横滑りしてスカウトされて登用されたのは自然です。さらに若い世代で沼津で生徒になり教育を受けた人も東京に行ってから明治政府に重く用いられた。それは江戸幕府がそれまで行っていた古い教育のやり方を改めて沼津に来て初めて取り入れた能力主義の新しい教育を行った成果です。

静岡に移ってきてからの徳川家は、幕府時代にできなかった教育改革、能力主義的人材抜擢を思い切つてやった、それが沼津兵学校です。正に西周のような優れた欧米の学校の仕組みを学んできた人がいたから理想を実現できたのです。沼津兵学校は田口や島田を含めて二百数十名、家柄や素性はまちまちな生徒を採用します。島田や田口も学力によって生徒になることができた存在です。そういうことがあつて徳川の人材は明治の中で益々役割を果たすことができた、沼津兵学校のような先進的の仕組みをとった学校があつたからいい人材を振るいにかけ、それを明治政府にバトンタッチすることがスムーズに行われた、というわけです。

江原素六については蘇峰も「沼津中学校の経営者にして最初の校長は、実に江原素六君であつた」と名前をあげています。江原は兵学校の教授ではなくて静岡藩少参事、軍事掛りという学校の管理部門の幹部の一人として学校の運営を任されます。



江原素六翁

蘇峰は官員録をめくると、明治政府の役人として旧幕臣が能力を発揮できたかということを書いています。その一方で、新聞記者のように民間にあって政府とは反対する立場で民主主義、国権ではなく民権の伸長にがんばっている人がいたのだということも見ています。

江原素六も正に島田、田口の大先輩にあたる沼津兵学校出身の在野を貫いた存在です。沼津兵学校が明治4年になくなった後、先生や生徒は東京へ帰り、優秀な学校も人材もなくなり沼津は火が消えてしまいます。江原自身も政府から呼ばれますが、この地に残り地域のために尽くすということでがんばった幹部級の中ではただ一人の存在です。沼津兵学校なきあと、沼津駿東富士郡辺りまでの教育を考えて小中学校を作った。小学校は集成舎という学校で今の沼津第一小学校につながり、集成舎の一部分を独立させた中学校が沼津中学校。これが米山梅吉が学んだ沼津中学校で江原が校長を務めます。

優秀な幕臣は明治政府から引く手あまたで東京へ行きました。静岡県内に残された旧幕臣は自分達で自活していかなければいけなかった弱い立場の人です。江原は、士族授産ということで、愛鷹山の山裾を利用して、西洋式の牧畜や、お茶、こうぞみつまたの栽培もやりました。

沼津中学校の校長時代、英語の教師カナダ人ミーチャムがカナダメソジスト派プロテスタントの宣教師だった影響で、江原校長自らが感化をうけ洗礼を受け、先生や生徒にもキリスト教が広まります。その後カナダメソジスト派の教会、今の日本キリスト教団沼津教会ができます。その拠点としてキリスト教が広まり、江原は一切の公職をなげうって伝道活動に専念します。米山が沼津中学で学んでいた時、旧幕臣の反骨精神とか自由民権へのシンパシーとかキリスト教的雰囲気など、その余風は残っていた。米山はその時入信はしませんが、後にアメリカに行ってキリスト教に入り、青山学院に入ります。明治23年第1回衆議院が開かれた時には立候補。当時の静岡県第7区（駿東郡と伊豆）から出て以後長く連続当選しています。後に東京に地盤を移し、東京からも衆議院議員になり、最後は貴族院議員になって大正11年に亡くなります。官僚としてではなく、駿東や伊豆の人が担ぎ上げてくれた力で国政の場に送りだされ、板垣退助が作った自由党憲政党立憲政友会の幹部として、政治家になりました。東京に活躍の場を移しミッションスクール東洋英和学校（現麻布中学）の校長になり、なくなるまで務めた。政治家

であり教育家であり、クリスチャンであるというのが江原素六の顔だったわけです。常に在野の立場の江原を、米山さんは郷里の大先輩として意識し尊敬していたはず。実際、江原家は三井物産の人脈につながります。米山は三井銀行です。しかし政財界で癒着したことはなく、清貧なクリスチャン政治家として通っていました。そういう面で米山さんと重なる部分がある、正に沼津兵学校という存在がその原点にあったのです。

梅吉自身、少年時代に沼津新聞に投稿して政治的論調を主張しています。年若くして自由民権運動にのめり込んだ、それは沼津中学の先生に旧幕臣で反骨精神を持った人がいたからだ、と『幕末西洋文化と沼津兵学校』にはっきり書いています。沼中と兵学校については「斯かる傳統と兵學校を繼承せる沼津中學校のありし間は過去の歴史を慕ひ來り學べる諸生のために一種の感化を齎らしたことで、筆者の如きも生涯去りがたき記憶を此に留むることである。」古い沼津中学校がある間は沼津兵学校から沼津中学校へ繋がる伝統があつて米山自身も生涯忘れがたい記憶が沼津中学時代に埋め込まれたのだと書いています。私が自分自身に照らし合わせてこの本で一番好きな箇所はここです。反射炉を作った葦山の江川坦庵にもページを大きくさいています。

江川坦庵は時代が違いますが、同じ流れの上にあります。西洋式の新しい陸軍、お台場や反射炉、農兵を取り立ての提唱、西洋式の新しいを陸軍の仕組みを取り入れなければ日本も欧米列強に対抗できないといち早く唱えたのが江川です。その流れの中で幕府は倒れたが最後の花として徳川家が開かせたのが沼津兵学校という西洋式の陸軍の学校、だから葦山と沼津は同じ流れにあるのだということを梅吉はこう書いています。「天城山を源として葦山に沿ひ蛭小島を控へて流るる狩野川の水は、僅かに數里を出でずして沼津の海に注ぐのである。葦山は専ら兵術を以て前に、沼津は主として人文を以て後に、急轉直下したる若干の年所を隔てて各日本の文明進歩に寄與するところ大なりし此兩地が、かくも指呼の間に並び存すといふも亦た太だ寄にして、人をして駿豆山川秀靈の氣がこの苾様式の文武發育の淵叢に映發するものあるを懷はしめることである」葦山と沼津が新しい文武の教育の発祥の地として天城山に源を発した狩野川が流れていく僅かな距離のところにこんなに近くにあるんだ、ということを郷土人としての誇りをもって書いた部分です。同郷の皆さんとして感じて頂けるところがあつたと思います。



米山梅吉と俳句

井口 賢明
(沼津北 RC)

本稿は、米山梅吉の俳句の内容を云々するものではない。前号の浜田義一「米山梅吉をめぐる」から示唆を得て、主に白人会のことを中心に、米山の俳句の外縁を考えてみようとするものである。

【はじめに】米山が短歌や俳句を嗜んだことは知られている。短歌については、自らの手で歌集が公にされている。『八十七日』『東また東』『四十雀』である。しかし、米山の手で句集が出されたことはない。米山が亡くなった後、青山学院初等部が『米山梅吉傳』、『米山梅吉選集』上・下巻を出版した。昭和35年5月のことである。この『傳』の「俳句選集」に274句、『選集』下巻、「藍壺俳句」に273句が登載されている。これは、米山の手になる『藍壺俳句』と題する草稿からのものである。

この草稿であるが、達筆で、とにかく正確に判読するのは至難の業である。このため、両書が同じ『藍壺俳句』をもとに、同一人の編集で、同時期に発行されたものであるにしては、若干の混乱がある。例えば、下表のものなど（左欄が『選集』、右欄が『傳』）。

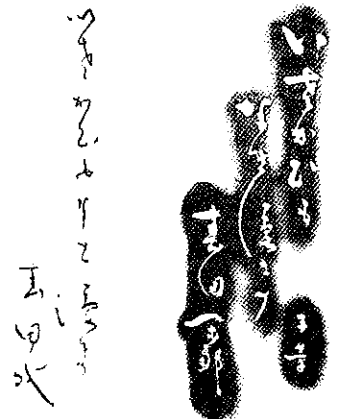
おそらく、先に『選集』を校了、印刷に回したが、『傳』を出版する段階で、さらに精査、検討の結果、訂正をしたものであろう。その意味で、『傳』のものによった方がよい。ただ、素人なりに考えてみて、「村千戸」（傳）は、「村十戸」（選集）の方が情景にあうように思う。また、『傳』の「葛紅葉」は、『選集』の「蔦紅葉」の方が語呂がよいし、蔦と読める。

なお、われわれに最もよく知られている「いさかひもなく漫々の青田かな」の句であるが、『傳』では、このとおりであるが、『選集』では「いさかひもなく水漫々の青田かな」となっている。草稿が二つあるとは考えられず、『選集』は、筆がすべて、水が入ってしまったといつてよさそうである。

さらに、いささか困惑していることであるが、最近、米山の俳句を見直すため、米山の草稿である『藍壺俳句』を2人の

書道の先生に見てもらった。その結果、2人とも「青田」の青は春としか読めないという。一方、米山自身も「春田」と認識していたといつてよい。というのは、米山は、『藍壺俳句』の句の配列について、ある時期までは春（含む新年）・夏・秋・冬のグループごととしている。そして、この句を春の部に配置している。ところが、「青田」は夏の季語である。もし米山が「青田」と意識していたのであれば、夏の部に配置したであろうからである。この句の碑が米山梅吉記念館の境内にある。『藍壺俳句』の段階では「春田」でも、せめて句碑作成の段階では「青田」であつて欲しいとの思いであつたが、やはり「春田」と読めるという。この句は、これまで大勢の人に語り伝えられてきた。米山の言おうとしている句の意味からも、「青田」の方がびつたりする。今更という気持であるが、悩ましいことである。ちなみに、この句は、大正6年4月14日の白人会句会でのものである。そのときの題は「春田」であり、4句作られたものの一つである。

また、形式的なことだが、登載の句数が『選集』と『傳』では一つ違う。これは、『選集』が草稿である『藍壺俳句』の句部分、句碑の拓本



『藍壺俳句』の句部分 句碑の拓本

江の入りに桃を咲かせて村十戸
群仙は空を下りて耶馬の秋
劍客は虎溪歸りや宵の暗
蔦紅葉引行く馬の手綱哉
悠々の世間の空なり秋高し
大河原十すちに割つて春の水
病つきの石に蟬蟻の青き哉
もう咲いたもう散つた今年それでよしゝゝ

江の入りに桃を咲かせて村千戸
群仙は雲を下りて耶馬の秋
劍呑な虎溪歸りや宵の暗
蔦紅葉引行く馬の手綱哉
悠々の蒼の空なり秋高し
大河原千すちに割つて春の水
病室の庇に蟬蟻の青さ哉
もう咲いたもう散つたとやそれでよしよし

壺俳句』の欄外に挿入してある句の一つを載せなかったことによるものである。そして、両者の配列にいくつか相違するところがあるが、これも欄外に挿入してある句をどこに入れたかの違いによるものである。

【白人会のこと】米山の俳句をみるとき、白人会の存在は欠かせない。白人会の由来、経過については、既に浜田氏の前号の稿に述べられているので、白人会発行の『白人集』（昭09.09.05）をもとに、簡単に触れてみる。

白人会は、明治33年、巖谷小波がベルリン大学附属東洋語学校講師として、赴任した折、当時ベルリンに在住していた外交官や留学をしていた学者の玉子などが小波を宗匠として作られた俳句の会である。白人会の命名は、小波である。ベルリンは、漢字で伯林と書く。その伯の字を偏と旁に分けて白人とした。それには、素人の句会という意味もこめられているという。いかにも小波らしく洒落気のある発想である。その後、ここでの同人が追々帰国した。やがて、小波も帰朝した。そこで、東京でも白人会が続けられることとなった。

ベルリンで初の句会は、明治34年1月である。東京での最初の白人会は、明治35年6月のことである。これには、多くの新しい会員が加わるようになった。そして、角田竹冷（明治36年9月から）、星野麦人（東京で当初から）ら、いわば玄人とされる人も加わった。この会は、小波が昭和8年9月に亡くなった後も続けられた。

ちなみに、『白人集』の発行者は、白人会であるが、編集、発行人は、加藤正治となっている。この人は、ベルリンから参加し、白人会では、犀水という号であった。実際の職業は、東大の法学部教授で、民事訴訟法を担当していた。

【白人会での米山の句】米山は、大正5年11月、白人会に入会し、当初のころは、よく出席していた。大正6年には6月までに5回出席している。その後欠席が多く、大正7年には1回もない。大正8年に3回、以下2回、1回、2回、2回、そして大正13年で2回である。ただ、その前月に宿題が出ていて、それに対する投稿は、12回に及んでいる。一方、いつ退会したか明確でない。『白人集』に載っている米山の句の最後は、昭和3年5月（投稿）のときのものである。

さきのように、白人会発行の『白人集』という句集がある。これは、句会でできた全ての句を登載してあるわけではない。その編集者によれば、「白人會の句稿は伯林集以來のもの悉くが、先生〔巖谷小波〕の手により一年ごとに合本され、九段下の大橋圖書館に寄贈、

保存せられてある。本句集は畢竟其の合本中より麥人〔星野仙吉〕君の手で選句抄録したもの」である、というわけである。

『白人集』のなかには、米山の句が52ある。そのなかで、米山の句が最初にでてくるのは、大正6年1月のものである。最後は、昭和3年5月のときのものであるが、このときは、句会に出席せず、投稿のものである。このうち、『傳』や『選集』に登載されているものは、25の句を数える。載せられていないものが27である。『白人集』は、非売のものであるが、米山は『白人集』を所蔵していた。米山の蔵書の一部が米山梅吉記念館にあるが、このなかに『白人集』がある。『白人集』にあるものがなぜ米山の草稿である『藍壺俳句』に記載されなかったのか。必ずしも気に入らないから載せなかったとは考えにくい。句帳によっていて、『白人集』をあまり意識していなかったのであろう。

『白人集』の「はしがき」に出ているように、白人会での句すべてを小波により合本されたものが大橋図書館にあるという。この大橋図書館というのは、明治期以降博文館という大手出版社を運営していた大橋新太郎によるものである。私立の図書館であるが、十八万冊の蔵書があったという。この図書館は、戦後、三康図書館に引継がれているというので、その存否を確認してみた。その結果、これも引継がれていて、閲覧することができた。ここでは、『白人集』に載せられていない米山の句65を見つけることができた。このうち、『藍壺俳句』に載せられているもの20であり、載せられていないもの45である。すなわち、この45は、『藍壺俳句』、『白人集』のいずれにも載せられていないわけで、全く公になっていないものである。

このように、白人会での句について、『白人集』に載っているもの52、他に白人会の合本に載っているものが65である。この117のうち、『藍壺俳句』に載っているものは、45である。これは、『藍壺俳句』の句数270余からすれば、多いものではないが、『藍壺俳句』には題、配列からいって、白人会の句会に関係してのものと思われるものが相当数ある。特に大正年代のものについてそうである。これは、与えられた題で作句したもの、あるいは白人会に欠席したが寄稿しようとして、そのままになったものなどと考えられる。その他、白人会という前書で「座に奇人奇句あり空には奇峰あり」とか、小波の千馬閣にてという前書で「分捕の馬もつなぎて青葉かげ」などもある。

また、句会では、そのときの席題の外に、同人の送別会、歓迎会のものとか親族の死を悼むものなどがある。米山についていえば、長男東一郎（大正10年2月の句会）、岳父藤三郎（大正11年11月の句会 このときは米山は欠席）を悼むものも作られている。

このように、米山の俳句について、白人会の存在は大きいというべきである。

【米山の俳号】米山は、この白人会に「尋九」という俳号で参加していた。この「尋九」という俳号は、小波がつけたものだという人がある。『傳』のなかの比屋根安定「直接に見聞した事ども」という稿に、「故人は、俳句を作られ、号を尋九と称し、米山甚句をもじったもので、巖谷小波が付けたとの直話でした」とある。

一方、『傳』の伝記部分の執筆者佐々木邦の「創意と奉仕の一生」のなかに、以下のような記載がある。ある句会の折り、まだ俳号がなかったので、「どうかと俳友に相談した。駄洒落の名人和田垣謙三博士がその場に居合せて、米山なら甚句だろう、米山甚句というからと戯れた。」と。それにつづけて、以来「甚九と号したと伝えられているが、これは作り話だったろう、米山は凝り性だから、そんなことで俳号をきめなかったと思われる。」という。

和田垣謙三は、米山より8才年上で、法学博士であった。なかなか奔放磊落な人で、人のことなどあまり気にしなかったようで、東大では講師を務めたが、教授にはなっていない。長く東京商業学校校長を歴任した。白人会には、

米山より早く、大正3年11月には、吐雲という俳号で出席している。白人会には熱心で、出席率もよかった。そして、『木太刀』という俳句の雑誌があり、これに俳句英訳などという欄を担当したこともあった。

この『木太刀』には、俳句の会の情報が掲載されていて、白人会のそれも毎例会のものが記事にされている。この大正5年12月号（14巻12号）に、その年11月13日開催の白人会11月例会の状況が記されている。これには、



「初めて出席の米山氏號を嵐湖と命名の披露ありし處、和田垣氏の修正に依り號を尋九、庵號を一得庵と命名決定。」とある。したがって、佐々木のいうような作り話ということではないわけである。これについて、こんなことが考えられないだろうか。和田垣が米山甚句から、甚九だというのに、

そのやりとりを小波がとって、米山甚句からの甚九では余りに芸がなさすぎる、せめて甚を尋に変えて、尋九にしたらどうだと。小波の即妙な洒脱ぶりを考えると、このようなことも想像されるのだが。そして、これは、米山の直話だという比屋根の説を裏付けることにもなる。

米山には、他に「梅馨」「八十八峰」「藍壺」「子幸」などの号があるが、「尋九」というのは、白人会のときだけである。米山は、尋九という号をあまり気に入っていなかったように思える。

【米山の俳句を始めた時期】米山がいつごろから、俳句を始めたかは明確ではない。佐々木は、俳句を割合早く始めたようにいつている。すなわち、漢詩は少年時代からやっていた、次が俳句で、和歌は中年からと。浜田は、俳句は恐らく漢詩より早くから作っていたことだろう、という。しかし、俳句について、中年より前のもの、漢詩より前のものを確認することはできない。

『傳』の編者は、『藍壺俳句』は、ほぼ年代順であるという。米山の俳句で、作句の時期が明らかになるものがある。例えば、外国に行つてのもの、前書などで年代のわかるもの、白人会でのもの、などである。大半はわからないが、このことを頼りに並べ替えると、多少の出入りがあるとしても、略年代順である。

人が配列を考えると、年代順が一般的である。俳句では、それを年代順だけで並べると、季節がまちまちなになる。『藍壺俳句』は、ある時期までは、季節ごとになっていて、そのなかでは、略年代順のようである。

作句の時期が明確なもので、一番早いのは、大正6年1月16日の白人会例会での「場所の春立つや勘太の呼声に」の句他である。これより前にあるのは、春（新年）の季題の部分では4句である。『藍壺俳句』、白人会でのものの他に句があるかもしれない。白人会以前に、あるいは他の句会に出ていたことがあるかもしれない。『藍壺俳句』で大正6年1月より後に位置しているもののなかに、これより以前の作句のものがあるかもしれない。

しかし、その前年大正5年11月13日開催の白人会の席で、俳号をどうするかが議論されている位である。これからすると、少なくとも、その以前、他の俳句の会に属していたとは考えられない。

一方、白人会の最初の句会のときの句が見あたらない。このときの題は、「熊」と「網代」である。『藍壺俳句』には、この季題の句が見あたらない。『白人集』にもないし、白人会の合本にもない。俳句の会に初めて出たのだから、作ってみようとするのは当然である。前から俳句をやっていたのであれば、何句かはすぐに

も浮ぶであろう。普通なら最初に出た句会でのものは印象深い筈である。作ってみたけれど、余り出来のいいものでなかった、このため、そのとき作ったものを表に出さなかったとでもいうのであろうか。このようなことは、米山の性格からいって考えがたい。このことはよくわからないが、初回だから見学がてらということでもあったのだろうか。

いずれにしても、米山が俳句を始めたのは、このときより、それ程前ではなかったと考えたい。推定としかいえないわけであるが、米山が俳句を始めたのは、大正5年ころからであろうか。そして、本格的に始めたのは、白人会に出席するようになった大正6年初めころからであると考ええる。

ちなみにであるが、「万歳を天下しも月十日哉」という句に「大正天皇御即位式」という前書がある。大正天皇の即位式は、大正4年11月10日である。一方、昭和天皇のそれは、昭和3年11月10日である。このように、月日は同じなので、このことで識別できないが、配列の順序その他の状況からして、昭和を大正と書選えたとすべきであろう。

【米山の俳句の師匠】佐々木は、「創意と奉仕の一生」のなかで、米山が俳句を学んだのは巖谷小波からという説があるが、そうではないという。その理由として、二つをあげる。一つは、小波が米山より年下、3才若いという。しかし、芸事や学問に年令は関係なからうに(ただ、これは文章のあやというものかもしれない)。もう一つは、小波の俳句は素人芸だったからという。そして、米山が師事したのは、沼津の大先輩角田竹冷だという。竹冷は、米山より一回り上でもあるというのである。

ちなみに、浜田によれば、米山が白人会に出るようになったのは、竹冷の手引きだろうという。そうであろう。同じ駿河の出身で、俳人として名をなしていた竹冷の推薦によることは考えられることである。なお、竹冷は、米山が最初に出席した白人会のときは、「此日俄に差支ありて」「後便にて句を送るべき由傳言」ありて欠席であった。

いままで知らなかったが、竹冷の句碑が沼津の千本浜公園に、沼津ゆかりの若山牧水や井上靖の碑とともに立っている。牧水の碑や井上靖のモニュメントより古く、大正9年「秋声会」によるものである。これには「時は弥生 瓢枕に 軒かな 竹冷」と刻まれている。その形は、竹冷が愛用した顎杖を象ったものだという。

この碑は、竹冷が亡くなった後、沼津の他に東京、京都に建立すべく、寄進が呼びかけられた。当然米山も相当額を出捐している(1口5円10口)。沼津では、

大正9年10月16日に除幕と句会が開かれた。これには、小波が出席した(米山は出席していない)。

沼津市による竹冷についての解説がある。これによれば、次のようである。

角田竹冷は、本名を真平といい安政3年(1856)富士郡柚木村(現富士市柚木)に生まれ、沼津で働きながら苦学し、やがて東京へ出て代言人〔弁護士〕となった。東京府会議員、衆議院議員、東京代言人組合長〔現在でいえば東京弁護士会長〕等多くの公職を歴任したのち、大正8年(1919)、62歳で亡くなった。幼少の頃から俳諧を好み、明治28年(1895)、尾崎紅葉らと秋声会を結成、「秋の声」を刊行した。明治30年前後には、毎日新聞に俳句欄を設けたり、尾崎紅葉らと読売新聞の懸賞俳句選者を務めたり、その政治面に俳句を挿入したりして評判となった。また、明治20年6月、日本橋の浜町河岸で起こった箱屋殺しで弁護を引き受けたが、この事件が後に歌舞伎の「月梅薫籠夜」として取り上げられ、竹冷役を尾上菊五郎が演じて大きな話題となった。

解説にもあるように、竹冷は、明治28年10月、尾崎紅葉らに俳諧の会の結成を呼びかけた。これには、紅葉の働きかけで小波も参加した。これは、いわば知合い同士という誘いでもあったため、多くが集り、俳壇の一大結社として発足したという。

会の名前は、「秋声会」となった。最初の会合を竹冷宅で開いたが、そのとき高点を得た「秋の声するかと竹をゆすぶれり」(岡野正味作)から、秋声会という名前になった。

このときは、紅葉や小波は、出席予定だったものの欠席だった。この会の参加者は、俳句以外に本来の仕事や職業を有していて、当時盛んだった正岡子規一派の日本派とは一線を画し、遊俳としての俳句を楽しんでいたという。

ちなみに、先の『木太刀』という俳句の雑誌は、「秋声会」の機関誌の流れをくむものである。「秋声会」の機関誌は、『秋の声』『俳声』『卯杖』と代っていった。『卯杖』は、明治36年1月創刊された。発行所は、「秋



竹冷の句碑

聲會出版部」となっている。翌37年10月号では、秋声会十周年記念録として、竹冷、紅葉、小波などの創立当初の文章が採録されたりしている。この『卯杖』もやがて行き詰まってしまった。明治42年、7巻3号で『卯杖』を改題して、次号から『木太刀』とされることとなった。こういう同人誌というものは、よほど献身的、情熱的な編集者がいないとやっていけないのであろう。最終号(7巻3号)には、『木太刀』次号予告として、徳田秋声、巖谷小波、岡本綺堂など今のわれわれでも記憶にある作家などの文章が予告されている。『木太刀』は、正式には、秋声会の機関誌ではないが、後見を竹冷、小波とし、編集に麥人が携わり、長く続くことになる。

話が横道にそれてしまったが、ここに見るように竹冷が俳句について、相当な実力者であったことは、そのとおりであろう。素人なりに、狭い範囲で資料を目にしている、俳句の文章などにも迫力を感じる。

白人会においても、竹冷は、いわば師匠格で出席している。竹冷の存在は、宗匠の小波にも劣らないものを感じさせる。ここでの竹冷の米山への影響は大きいといつてよいであろう。また、ロータリークラブの関係者にはよく知られていることであるが、米山は、大正7年元日、アメリカのテキサス州ダラスで、三井物産駐在員福島喜三次の家を訪ねた。そこで、3つの句を残している。そのダラスから竹冷宛にその内容と同じ句をしたためた手紙を差出している。『木太刀』大正7年2月号(16巻2号)に次のような記事がある。

TEXASより 尋九 米山梅吉

目下南部諸州巡遊中に有之僅に一二句を得申候
御叱正願上候 早々

ダラスに新年を迎へ可申候

十三州は昔なりけり雪千里

メキシコの境までゆく枯野哉

新年賀上候(大正七年一月一日)

テキサスの野に東や初日出

(竹冷先生宛)」というものである。

TEXASより 尋九 米山梅吉
目下南部諸州巡遊中に有之僅に一二句を得申候
御叱正願上候早々
ダラスに新年を迎へ可申候
十三州は昔なりけり雪千里
メキシコの境までゆく枯野哉
新年賀上候(大正七年一月一日)
テキサスの野に東や初日出
(竹冷先生宛)

『木太刀』の記事

小波にも差出したかも知れないが、この手紙は、佐々木、浜田の説の裏付けとなる。

ただ、白人会での竹冷と米山の接点は意外に少ない。米山が白人会に入った後、竹冷が亡くなった大正8年3月までの2年余で、米山が句会に出席したのは6回である。そのうち、竹冷が出席しているのは4回である。句会としての出会いはたったの4回というわけである。師としての影響をうけるのは、単に時間の長短ではないであろうが、それ程長くはない。とても、和歌における佐佐木信綱との関係のようなわけにはいかない。勿論、白人会以外での俳句の接点が全くないとは断言できないとしても。

ところで、佐々木のいう小波が素人芸であったかどうかについて、云々できる力はない。小波が遊俳という立場で、俳句を専門としていなかったことはそのとおりである(この点は、竹冷も同じである)。しかし、小波は、俳句について大いに活躍していて、これに相当なエネルギーをさいている。白人会のほかにも、俳句の会を持っている。俳句の雑誌でも選者をつとめている。そして、世間一般でも、俳人としての評価を得られていた。

『太陽』という雑誌が明治32年6月、その出版社博文館の創業12年の記念に、明治十二傑という特集をした。政治、文学など12の部門で、斯界の第一人者とされる人の人気投票を企画したわけである。その結果は、政治家では伊藤博文、教育家では福沢諭吉、軍人では西郷従道、工業家では古河市兵衛、商業家では渋沢栄一などである。

これに付随して、文芸ともいえる詩、歌、俳句、書、画の五つの部門の第一人者について、全国に投票を募った。それぞれの部門で、12の大家を選んだ。俳句の部門では、2位正岡子規6647票、4位尾崎紅葉6382票、6位に角田竹冷5281票、7位に巖谷小波4220票である。寸評の一部に、竹冷について、「同志と共に秋声会を組織し、雑誌『秋の声』を発刊す。又俳諧木太刀の選あり。」、小波について、「俳諧は、新派に属して、秋声会に加盟し、俳諧文庫中に編集多し。」とある。人気投票だから、俳句としての力がどうこうではないが、2人とも俳人としても、認められている。

米山の俳句の師匠が誰かの詮索は別として、米山は、俳句について、白人会で研鑽をしたと考える。

これまで見てきたように、米山が本気で俳句を始めたのは白人会に出席するようになってからといつてよい。初期、大正年代における米山の句は、白人会でのもの、白人会に関係してのものが圧倒的に多い。また、白人会の同人は、大学教授、医師、実業家など錚々たる人が多い。米山は、このようななかで、率直な意見をいいあい切磋琢磨したことであろう。

若き日の米山梅吉

大阪梅田RC 辻中 昭一

米山梅吉という名から

昭和35年、佐々木邦氏の執筆により『米山梅吉伝』が発行された。ユーモア小説作家の佐々木氏の或る小説の中に「ボッコーのエアポケット」という一語がある。「ボッコー」とは木(ボク)とコー(公)が組み合わされた「松」という字。エアポケットとは「枝」を暗示し、或る大切なものが「松の枝」とかくされている、とお話である。

この佐々木氏のお話から、私は、漢字学による米山梅吉、更には、中国において千年以上も研究し続けられて来た姓名哲学の成果を心に思い浮かべたのであった。それによると「米山」という姓は「事物の完成を目指しそれを実現して行く人」「梅吉」

という名は「一を聞いて十を知る、というような賢明さを持つ人」と解釈される。

米山梅吉の生涯において、この姓とこの名の特質が、どのように具体化されたのかは、個々の人びとのご判断におまかせしたい。

米国生活の中で

米国で出会った多くの人たちから“What's your name?”と聞かれた時“My name is Yoneyama Umekichi”と答えたと思われる。すると“Yone what?”と向うが聞き返す。そこで米山はゆっくりと“My name is Yo-ne-ya-ma”と発音する。“Oh, I see, Yoneyama is your name. Is this OK?”というような会話が展開する。“Then, what's the meaning of Yo-ne-ya-ma?”と更に質問が返ってくる。そこで米山は知恵を絞って“Yo-ne means ‘Rice’ in Japanese and ya-ma means mountain. So my name is ‘Rice mountain’ in Japanese”というようなやりとりが続いたことであろう。日本人は米を食べる。その米を食べる日本人の一人の“Rice-mountain”(米山)が我々の仲間の一人になった。と皆から大いに歓迎された。“Rice mountain”は面白いニックネームとして、友だちの挨拶の中で“Hi Rice”とか“Hi Rice mountain”というように次ぎ次ぎ用いられた様子が目に浮かぶ。

福音会において

米山が若き日、友人たちと生活を共にした場は福音会であった。福音会とは一体、何であったのか。これも推測する以外に無いのであるが、その名より考えられるのは、今で言う伝道所 小チャペルのような集会、礼拝の場所ではないだろうか。数人から10名前後の若者たちが寮のような形で使用し、日曜日になると部屋の模様替えをし、礼拝を守る場所とした。そこへ近所の人びとも加わって20~30人ぐら

いで礼拝を守った。讃美歌が歌われ、聖書が朗読され、館長、或いは近隣の牧師がメッセージを語る、というようなスタイルであった。「アーメン、アーメン」(本当です、という意味のヘブライ語)や「ハレルヤ、ハレルヤ」(神をほめたたえよという意味のヘブライ語)が日曜礼拝に参加した人びとの口から溢れ出し、何とも言えない連帯感が生まれた。そして礼拝後には、“God bless you” “God bless you” (神の祝福がありますように)と握手を交わしながら言い合ったのであった。

大学での学び

米山がオハイオ州のウエスレアン大学から学位を得た、ということから類推すると、米山はこの学校の聴講生、或いは特別学生として色々な講義を受ける機会を与えられ、友人たちから誘われてあの科目、この科目と勉学の範囲を広げて行ったものと思われる。彼の持っていた積極性や聡明さが、勉学を容易にし、また学生生活をも豊富にさせ、交遊関係は可成り拡大して行った事が想像できる。

勉学を終えて日本に帰ることになった時、彼に与えられた一つの役割は「宣教師」であった。この資格が与えられた、ということは、米山の米国における勉学と大いに関連しているものと推測される。それはキリスト教関係の勉強、旧、新約聖書の勉学、キリスト教会の歴史、布教方法などが十分に修得されていないと、この資格は与えられないし、更にはメソジスト教会の監督、牧師らとの交流無しには考えられないのである。また法律、経済、科学なども、大いに米山の心を捉え、これらの学びが、米山の実業界での躍進に寄与したのであった。

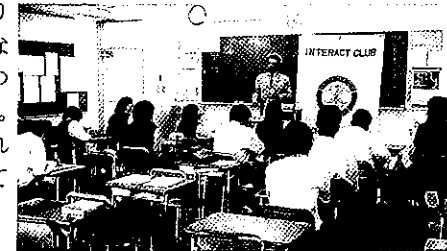
日本への帰国

帰国した米山の精神的拠点となったのは、日本メソジスト教会であった。しかし、米山の実業界への関与が大きくなるにつれて、キリスト教の布教活動に力を注ぐことができなくなった。帰国後の米山と、メソジスト教会との関係、その他については、銀座教会の報告に記載されていると、三井勇牧師から伺ったとがある。三井牧師は私に「米山さんとロータリークラブ、或は実業界での関係は比較的良く知られている。しかし、宣教師として日本に帰国された米山さんの事はほとんど知られていない。銀座教会の月報を一度読んでみられたら…」とのご教示をいただいたが、それはまだ実現していない。



立花学園高等学校インターアクト活動報告

6月14日、米山梅吉記念館を訪ね、名前も顔もわからず顧問の先生から話を聞くまでは全く知りませんでした。私がインターアクトに入った理由は国際理解・社会奉仕に興味があったからです。米山先生は大正時代に日本で初めてロータリークラブを設立し、生涯を人のため社会のために一生懸命努力されました。展示室で記念館の人が話した「人は見えないところで右手と左手はつながっている」という気持ちが米山の精神に通じるのではないかと、という言葉に感銘を受けました。米山さんが紺綬褒章や勲四等瑞宝章を受賞されていたことを知り、私達は相手を思いやり優しくすることも一生変えることなく、アクターみんなが団結して一つの事に取り組む大切さを学びました。今後も無償で沢山の人を喜ばせられるアクターになれるように頑張っていきたいと思っています。



本校は平成3年松田高校から立花学園高等学校に校名を変更し、現在生徒数は1,125名が学んでいます。昨年創立80周年を迎えることができました。我がインターアクトクラブは小田原北ロータリークラブがスポンサークラブとして国府津館の簗島先生のご尽力により昭和44年10月に設立されました。以来、幾多の困難を乗り越え41年の歳月を経ています。以前は何度かアクター不足やカリキュラムの関係で活動が壊滅状態となり、インターアクトクラブ存亡の危機にも何度か直面しましたが、地道に活動を継続してまいりました。今年、3年生はいませんが、1・2年生19名のアクターで活動し、例会を毎週金曜日16時から教室で行っております。

本年度はロータリーの掲げた「夢をかたちに」を実現するために、まず行動を起こすことが大切であると考えています。活動内容は「国際理解」「社会奉仕」「相互親睦」の三本柱を着実に実行し、地味で目立つことはありませんが、スポンサークラブのご指導や協力により、地域に根ざした奉仕活動をゆっくりではありますが実践することで、認知され信頼を得ることができるようになったと思っています。お蔭様で昨今、県の出先機関の足柄合同庁舎・松田町役場・松田町社会福祉協議会とはもとより全国的なボランティア組織より連絡を受けるようになり、校名アップや本クラブの地域社会での認知度も日増しに高まっています。

まず、「国際理解」について、ここ2、3年程生徒の参加希望者がなく、寂しい思いをしていましたが、本年度は3名が参加し12月には台湾に行く予定です。

「社会奉仕」は二宮尊徳生誕祭手伝い、老人ホーム慰問で南足柄の足柄療護園での2か月一度の浴室清掃活動や松田町のレストフル・ヴィレッジ・南足柄「草の家」老人ホーム一泊体験学習、中井「やまゆり園」、中井

「老人保健施設みかん」での介護体験学習。障害者ふれあい体育祭の補助手伝い、県道沿線にパンジーなどの花の植栽、緑の羽根・赤い羽根等にも協力しております。また昨年四川省大地震義捐金校内募金を行い、日本赤十字社に寄託しました。毎年3月には松田町社会福祉協議会主催の「ふくしあったかフェスタ」にも参加協力をして、おでんと焼きそばの店を出し、売上金の一部を寄附します。おとしは松田町社会福祉協議会に文化祭の売上金を合算して車椅子2台を寄贈いたしました。

「相互親睦」については、4月に1年生新入アクター歓迎会、はじめて米山梅吉記念館と井上靖文学館訪問、夏休みに横浜地区とのサマーミーティング。本校単独での合宿。10月11日大磯プリンスホテルでのロータリー地区大会、足柄ロータリークラブ主催の「水源をたずねて」に参加し、植樹と水道水のことについての学習をしたりします。11月22日相模原産業センターでのインターアクト年次大会、卒業アクター送別会、3月には七沢の一泊研修にも参加します。

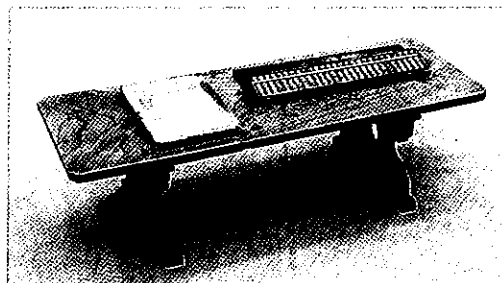
今年度は新しい取り組みとして、生徒達は将来介護職や保育関係への進学を希望しており、「人の痛みのわかる」人間形成を育み色々なことを体験してみることに重きを置き、企業体験を実施し職業観の動機付けを図って見ようと思っています。私達はボランティア活動を通して子供達にできることは、①将来の礎(いしずえ)を築くこと。②ボランティア活動を通して、インターアクト綱領にもある。他者を尊重し、進んで助ける態度を養い、一生懸命努力することの尊さを学ぶこと。ではないかと思っています。アクターが卒業後に様々な施設で介護師や看護師として勤務している者もあり、我々との繋(つな)がりを大切にすることが出来る唯一のクラブではないかと確信しています。これからも沢山の人のつながりを大切にして、人間形成のためにできる限り維持と今後益々の発展に微力ながら尽くそうと考えています。





館展示品

明治8(1875)年、長泉の納米里普向寺に、長泉村最初の小学校、映雪舎が開設された。校長は住職久我頑量、梅吉の兄和田栄次郎が教員として、6歳から13歳まで約50名の児童を指導していた。7歳になった梅吉は映雪舎に通い始め、13歳で沼津中学校に入学するまで、ここで学んだ。教育の基本となる読み書きそろばんを中心



米山が生まれた1868年、9月に元号が慶応から明治に変わり、日本は近代国家への第一歩を踏み出した。大政奉還により日本を統治してきた徳川家は一大名になり、その幕臣共々静岡の地に移り住む。徳川家が明治新政府に先駆けて新しい教育の必要性を察知し、実現したのが沼津兵学校であった。近代日本社会の土台作りは、百数十年前の、先人達の暗中模索の中から始まった。梅吉が通った沼津中学はこの兵学校の流れをくむものである。

昭和9(1934)年、米山は『幕末西洋文化と沼津兵学校』を出版した。前記例祭講演樋口氏の話にもあるように、沼津兵学校についての出版物としては珍しいもので徳富蘇峰も注目した。

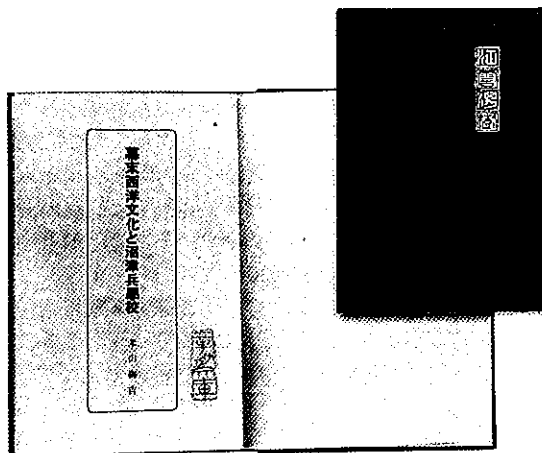
米山が沼津中学で学んだのはわずか2年足らずであったが、還暦を過ぎてからあえてこの学校について著述するということは、青春の思い出とそこで学んだ誇り、自身の人格形成へ与え

に、特に校長の久我は漢学者でもあったので、漢詩にもたくさん触れたであろう。

この度、長泉納米里の土屋弥介氏から、映雪舎で使われていた机が寄贈された。

知識欲旺盛の梅吉少年が、見ることも聞くことも全てを吸収しようと、嬉々としてこの机で学ぶ姿が浮かんで来るようである。

た影響からくる母校への愛着はもちろん、当時の教育と、それが日本の近代化にもたらした功績という意味でも、沼津兵学校に対する特別な思い入れがあったからであろう。翌年には訂正再版されている。



ご入会・ご寄付のお願い

平成10年に完成した米山梅吉記念館新館の運営は皆様からの寄付により行われています。

基本経費として米山奨学会や近隣地区によるご寄付、来館時のスマイルをはじめ周年事業寄付等様々な形でのご支援をいただいておりますが、主に下記の2つの募金運動によっております。前年度のご寄付の状況は下表のようになっています。

—100円の細い糸が館と全国を結ぶ—

全国1人年間100円募金運動 全国ロータリアンに向けて

事業費の不足をおぎなうために毎年度継続して行っております。クラブ単位、地区単位でご送金いただく方が便利ですが、勿論個人でも結構です。この運動も任意のご意志によってお願いしております。何卒よろしく願いたします。

振込先 (100円募金)事業資金振込先

郵便振替口座 番号 00820-4-57730 財団法人 米山梅吉記念館

100円募金地区別表

平成20年7月～21年6月現在

地区	地区名	RC	振込数	地区	地区名	RC数	振込数
2500	北海道東部	67	3	2670	愛媛・香川・徳島・高知	74	9
2510	北海道西部	73	15	2680	兵庫	74	14
2520	岩手・宮城	85	10	2690	岡山・鳥取・島根	67	23
2530	福島	66	8	2700	福岡・佐賀・長崎	59	6
2540	秋田	42	4	2710	広島・山口	74	34
2550	栃木	50	7	2720	熊本・大分	77	12
2560	新潟	57	7	2730	鹿児島・宮崎	64	4
2570	埼玉西北	55	12	2740	長崎・佐賀	57	8
2580	東京・沖縄	71	13	2750	東京・北マリアナ諸島・グアム・ミクロネシア	90	38
2590	神奈川	62	23	2760	愛知	81	16
2600	長野	57	8	2770	埼玉南東	83	17
2610	富山・石川	66	3	2780	神奈川	68	9
2620	静岡・山梨	81	25	2790	千葉	82	33
2630	岐阜・三重	80	17	2800	山形	54	7
2640	大阪府南部・和歌山	73	5	2820	茨城	59	11
2650	福井・滋賀・京都・奈良	96	12	2830	青森	40	7
2660	大阪府北部	86	11	2840	群馬	47	10
RC数 2,317		振込総数 441		合計 3,189,481円			

賛助会ご入会のお願い

館運営及び事業費の一部にあてるため、自主的な善意により賛助会員による賛助会費の運動を続けております。会費は、お一人年3,000円(1口)です。

個人でもクラブ単位でも結構です。賛助会にご入会していただくと年2回発行の館報を個人的にお届けすることができます。ぜひこの機会に賛助会にご入会いただきますようお願いいたします。

振込先 賛助会費振込先

静岡銀行 下土狩支店 普通 0367598 御米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助

賛助会費地区別表

平成20年7月～21年6月現在

地区	地区名	RC	口数	地区	地区名	RC数	口数
2500	北海道東部	67	1	2670	愛媛・香川・徳島・高知	74	0
2510	北海道西部	73	16	2680	兵庫	74	3
2520	岩手・宮城	85	0	2690	岡山・鳥取・島根	67	0
2530	福島	66	11	2700	福岡・佐賀・長崎	59	3
2540	秋田	42	1	2710	広島・山口	74	8
2550	栃木	50	3	2720	熊本・大分	77	0
2560	新潟	57	1	2730	鹿児島・宮崎	64	0
2570	埼玉西北	55	14	2740	長崎・佐賀	57	5
2580	東京・沖縄	71	9	2750	東京・北マリアナ諸島・グアム・ミクロネシア	90	4
2590	神奈川	62	67	2760	愛知	81	1
2600	長野	57	1	2770	埼玉南東	83	3
2610	富山・石川	66	0	2780	神奈川	68	12
2620	静岡・山梨	81	346	2790	千葉	82	1
2630	岐阜・三重	80	10	2800	山形	54	2
2640	大阪府南部・和歌山	73	3	2820	茨城	59	5
2650	福井・滋賀・京都・奈良	96	0	2830	青森	40	5
2660	大阪府北部	86	3	2840	群馬	47	3
RC数 2,317		総口数 543		合計 1,631,500円			

竹林浴！ 緑あふれる竹林を散策しませんか！



世界一の栽培種数を誇るタケ類専門の植物園です。毎年のようにタケの開花が見られます。



世界のタケ類700種・竹の資料館
富士竹類植物園

〒411-0932 静岡県駿東郡長泉町南一色 8 8 5 (米山梅吉記念館より 15 分)

TEL 055-987-5498 FAX 055-987-5413 <http://fujibamboogarden.com> f'bamboo@po2.across.or.jp

■開園時間：9:00～17:00 (ご入園受付 16:30 まで)

■ 4～11 月 火曜日休園 (祝日の場合は翌日) ・12～3 月 日曜日のみ開園 ・12/23～1/6 年末年始休園期間

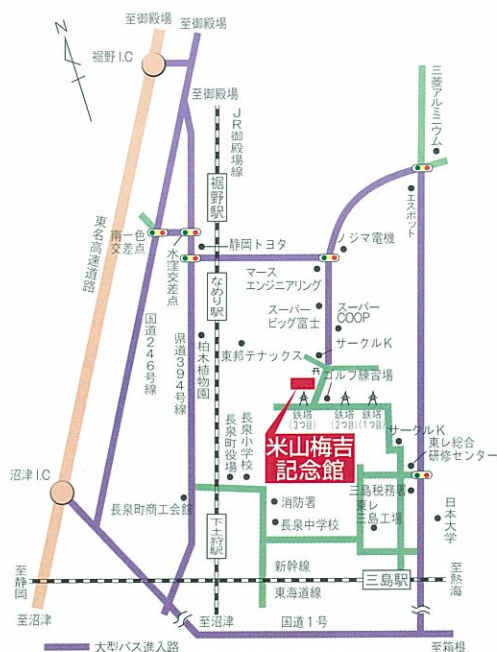
米山梅吉記念館のご案内

開館時間

午前10時～午後5時 (但し11月～3月は
午後4時まで)

休館日

- 月曜日
- 12月28日～1月4日
- 整理のための休館日 (5月・8月の特定日)



米山梅吉記念館 館報

Vol. 14

発行日 平成21年 8月10日
 発行者 財団法人 米山梅吉記念館 理事長 渡邊脩助
 〒411-0941 静岡県駿東郡長泉町上土狩346-1
 TEL (055) 986-2946 FAX (055) 989-5101
 URL : <http://yoneyama-umekichi.jp/>
 e-mail : yumh@ai.tnc.ne.jp
 印刷 フタバ印刷株式会社